

盗問とうもん

日柳燕石くさなぎ えんせき

盗問とうもん何なんの心こころぞ漫みだりに民たみを害がいす

盗言とうげん我わが罪つみは是これ織せん塵じん

錦衣きんい繡袴しゅうこ堂どう堂どうの士し

白日はくじつ公然こうぜん人ひとを剝取はくしゆ

【作者】日柳 燕石(一八一七〜一八六八年)江戸後期の志士、讃岐仲多度郡(なかつたぐん)榎井(えな井)村(現在香川県仲多度郡琴平町榎井)の人、本姓は草薙であるが、神器(じんき)の名を避けて父の代に日柳と改めた。幼いとき父を失い成長して琴平の三井雪航(みいせつこう)に師事し歴史に通じ詩文書画にたけていた。性豪放・俠気あり博徒 数百人の親分であつて、頼山陽に啓発されて勤皇の志を抱き、西郷、木戸等勤皇の士と交わる。戊辰の役に従い柏崎で病死した。享年五十二歳。

【通釈】盗賊に尋ねた。「お前らはどういう料簡で罪もない良民に危害を加えるのであるか」と。盗賊が言うには「おれたちの犯した罪はまことに些細なものでさあ。ごろうじろ、あの錦の衣に繡の袴をつけた堂々たるお偉方が、真昼間、公然と人民の衣裳を剥ぎ取っているんではござんせんか」と。